

「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナー

「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」開催記録

5. 木の命、木の心～技を伝え、人を育てる～



- 開催日時・場所
 - ・平成31年2月16日（土曜日）
午後1時30分～午後3時（開場：午後1時）
 - ・日本橋社会教育会館ホール
（東京都千代田区日本橋人形町1丁目1番17号）

- 講師



鳩工舎 宮大工棟梁
小川 三夫 氏



斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課
参事・考古学技師 平田 政彦 氏（写真右）

- 司会進行
斑鳩町観光キャンペーン大使 池上 真生

- 小川棟梁と平田技師による対談と、小川棟梁による槍鉋の実演



平成30年度文化庁文化芸術振興費補助金
（文化遺産総合活用推進事業）

す。

このセミナーは、「法隆寺地域の仏教建造物」がユネスコ世界文化遺産に登録されてから、25年になることを記念いたしまして、昨年の8月に、第1回目を日比谷で開催させていただきました。今回は第5回目ということで、早いもので最終回となりました。セミナー開催にあたりましては、本当に人が集まるのかと、大変懸念しておりましたが、募集を始めてから1週間ほどで、満員になったと聞いております。みなさんが、本当に高い関心をお持ちいただいているのだと、うれしく思います。感謝申し上げます。

さて、法隆寺が日本で最初に世界文化遺産に登録されたわけですが、登録に至るまでには、本当に紆余曲折と言いますか、多難な問題がございました。それはどういったことかと申しますと、西洋は「石の文化」でございます。そして、日本は「木の文化」でございます。そうした文化の違いを、西洋の方々にはご理解いただけなかったということでございます。法隆寺は、飛鳥時代の仏像など、日本で一番多くの国宝を有するお寺でございますが、1300年の歴史を持つ、世界最古の木造建築物でもございます。今日、日本の職人の技術が見直されてきており、高く評価をされておりますが、法隆寺が1300年もの長きにわたって、変わらぬ美しい建築様式を保ち、また計算された緻密な構造、そして東京スカイツリーにも取り入れられた、五重塔の免震構造など、こうしたものに見られるように、大変すばらしい、また高度な技術を持った専門家集団がいたことを、私たちは忘れてはならないと思います。

そういう意味でも、本日のセミナーは、フィナーレを飾るにふさわしい方をお迎えしております。本日のゲストは、鶯工舎 宮大工棟梁 小川三夫様でございます。小川棟梁には、本当にお忙しい中お越しいただき、誠にありがとうございます。本日のテーマは、「木の命、木の心～技を伝え、人を育てる～」と題しまして、斑鳩町の考古学技師 平田政彦との対談という形で、お話いただきます。どうかお楽しみにしていただき、最後までご清聴いただければと存じます。

最後に、少しPRをさせていただきますが、ロビーで斑鳩ブランド

	池上	<p>に登録されました、お菓子やグッズなどを販売しておりますので、御帰りの際に、どうかお立ち寄りいただきまして、お買い求めいただきましたら、幸いに存じます。</p> <p>みなさま方には、お忙しい中ご参加賜りまして、ありがとうございます。開会にあたりましての挨拶とさせていただきます。</p> <p>藤原教育長、ありがとうございました。</p> <p>舞台準備をいたしますので、しばらくお待ちください。</p> <p>この時間をお借りしまして、私から、世界文化遺産・法隆寺のあるまち・斑鳩についてご紹介させていただきます。</p> <p>斑鳩町は、奈良県の北西部に位置する、古来からの交通の要所です。飛鳥時代、聖徳太子が寺を建てるとにふさわしい土地を探しておられたとき、龍田明神が白髪 of 老人の姿となって、「ここより東に斑鳩の里がある。そこに寺を建てなさい」というお告げがあり、聖徳太子は斑鳩の里に法隆寺を建立されたと伝えられています。</p> <p>また、聖徳太子は、斑鳩の里に「斑鳩宮」「中宮」「岡本宮」「葦垣宮」の4つの宮を造営し、一族で暮らしておられました。今なお、斑鳩には、聖徳太子ゆかりの寺社や史跡と、つみかさなる歴史が多く残されています。</p> <p>そして、西暦607年に法隆寺が建立されてから1400年、平成5年12月には、「法隆寺地域の仏教建造物」が、日本ではじめて、姫路城とともに、世界文化遺産に登録されました。</p> <p>このセミナーは、世界文化遺産登録25周年を記念し、文化庁の支援を受けて、開催するものです。</p> <p>本日のテーマは、「木の命、木の心～技を伝え、人を育てる～」です。</p> <p>本日は鶺鴒工舎（いかるがこうしゃ） 宮大工・棟梁 小川三夫（おがわみつお）様と、斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課 参事で考古学技師の平田政彦技師による対談を、お楽しみいただきます。</p> <p>ここで、小川三夫様のプロフィールをご紹介します。</p> <p>小川三夫様は、斑鳩の宮大工・西岡常一（にしおかつねかず）氏の</p>
--	----	---

		<p>ただ一人の内弟子で、斑鳩町の法輪寺三重塔再建工事や薬師寺復興工事に携わられました。1977年には、寺社建築技法の伝承を根幹とする鳩工舎（いかるがこうしゃ）を設立されました。</p> <p>それでは準備が整ったようです。</p> <p>小川棟梁・平田技師、よろしくお願いいたします。</p> <p>みなさんこんにちは。</p> <p>先ほどから、お知らせさせていただいていますように、宮大工棟梁の小川三夫様と対談をさせていただきます。</p> <p>早速ですが、棟梁が宮大工を目指されたきっかけから、お話いただければと思います。</p>
平田		
小川棟梁		<p>昭和39年に、高校の修学旅行で初めて法隆寺の五重塔を見ました。そのとき案内してくれた人が、「この塔は1300年前に建てられたものですよ」とおっしゃった。「1300年前に、どうやってこれだけの大きな木を、そして、相輪をどうやって塔の上にあげたのか」、と思っているうちに、この仕事をしたらすごいなって思ったんです。ちょうどそのころ、ロケットが月に飛ぶような時代でした。ロケットを飛ばすということは、たくさんのデータをそろえてから、ことにあたるのだと思います。しかし、法隆寺の五重塔はそうではなく、造ろうという信念で造り上げたような気がしました。だから、これを造った工人達の血と汗を学んだ方が、大学など行くよりずっと良いのではないかと思い、目指したということです。</p>
平田		<p>修学旅行で、法隆寺の五重塔に出会われたということですが、そのあと西岡常一棟梁の門戸を叩かれたということですね。</p>
小川		<p>そうです。</p> <p>家に帰って、「自分はこういう仕事がしたい」と父親に言ったところ、父親はサラリーマンですから、「お前の考えはわかる。しかし、</p>

		<p>それは川を遡るようなものだ。苦しいだけで、周りの景色は変わらない。ほかには考えられないか。」と言われましたが、これをやろうと思ったので、勘当同然に家を出ました。ですから、高校を卒業する1ヵ月前に法隆寺に弟子入りに行ったのですが、私は、栃木県の生まれで、法隆寺に大工さんがいるかいないかもわかりませんでした。それで、奈良県庁に行って、「こういう仕事をしたいのでお世話になります。」と言いました。そうすると、県庁で、「法隆寺には西岡楯光（にしおかならみつ）という棟梁がいるから、そこを訪ねなさい。」と言われました。</p> <p>そして、法隆寺に行くと、大工さん二人が仕事をしていました。「西岡さんはどなたでしょうか。」と尋ねると、「西岡とは、誰か。」と言われました。緊張して名前を忘れたので、「名前を忘れました。」と言うと、「西岡は俺だ。」と言って話しかけてくれたのが、西岡常一棟梁でした。西岡楯光さんは、西岡常一棟梁のお父さんで、西岡楯光さんの長男が西岡常一棟梁、二男が西岡楯二郎さんで、3人で各現場を持って仕事をしていました。もしそこで、「西岡楯光さん」と言えば、西岡楯光さんは80歳を過ぎていたので、弟子をとらなかったと思います。ですから、「名前を忘れた」という私の頭の良さが、この幸運を呼んだということですね（笑）。</p>
平田		運命的なものを感じますよね。
小川棟梁		<p>そうですね。</p> <p>しかし、18歳で西岡常一棟梁と出会ったわけですが、そのときに、「もう年齢が長けすぎている」と言われました。そしてもう一つ、「今は仕事がない。」と言われました。このふたつの理由で、弟子入りを断られました。それから、「この仕事は、するな。」と西岡棟梁から言われました。「飯は食えない。嫁さんはもらえない。」と。なぜ、そのようなことを言ったのかはわかりません。しかし、確かに西岡棟梁は、宮大工の仕事以外に、お寺の大きな鍋のふたを作っていました。だから、仕事がなかったのでしょうか。</p>

平田		<p>西岡棟梁に、弟子入りを一度断られるも、小川棟梁は、再度弟子入りを希望されたのですか。</p>
小川棟梁		<p>「どうしても、と言うのなら」と、西岡常一棟梁が、文部省の建造物課に紹介状を書いてくれて、それを持って文部省に行きました。しかし、文部省は大工を養成するところではないので、「たとえ1年でもいいから大工道具を使えるようになれば、どこか現場を紹介する。」ということになりました。</p> <p>そして、行くところがなくて、長野県の飯山という、仏壇をつくっているところがあります。仏壇の屋根の部分を「空殿（くうでん）」と言いますが、それを作れるようになれば、少しでも宮大工に近いかなと思い、それを学びに行きました。</p>
平田		<p>それから、どういったきっかけで、奈良に来るようになったのですか。</p>
小川棟梁		<p>飯山で1年間仕事していました。それから、また法隆寺に来たのです。そのときちょうど文化財の監督さんが来られていて、島根県の日御碕（ひのみさき）で、図面書きの仕事があるということで、呼ばれました。でも、私は図面を書いたことがありません。技師の方であれば、3ヵ月程で書けるような図面を、見よう見まねで書くので、1年半かかって図面を書いていた。本当にお金のない生活をしていました。仕事をしていると、中学生が来て、「兄ちゃん、灯台に行こう。」と言われました。日御碕灯台というところで、東洋一高い灯台なのですが、そこに行って気晴らしをしたりしていました。</p>
平田		<p>島根県の日御碕で図面を書いておられたのに、なぜ斑鳩に戻られたのですか。</p>
小川棟梁		<p>図面を書く仕事が終わってから、兵庫県の豊岡で、神社の解体修理</p>

		<p>がありました。その仕事に携わっていたときに、西岡常一棟梁から手紙が来たのです。「これから奈良の法輪寺というところで、三重塔の現場があるから、お前1人くらいなら、来てもよろしい。」という手紙でした。初めて西岡常一棟梁を訪ねて丸3年経った4年目の春に、法輪寺に行くことができたわけです。ですから、行くことができるのは嬉しかったですが、丸3年の経験から、厳しさというのもわかっていたので、自分の持っている道具を、きれいにきれいに研いで、持っていきました。法輪寺に着くと、案の定、「道具箱を見せなさい。」と言われました。「鑿（のみ）」という、穴を空ける道具なのですが、これを見せると、「こんなんじゃ使い物にならん。」というような感じで、投げ捨てられました。そこから、弟子生活が始まるのですが、その次に言われたのが、「納屋の掃除をしなさい。」と言われました。納屋に上ってみると、そこには、これから建てる三重塔の、引きかけの図面がありました。夜なべ仕事で、「おどし」というものを造っていました。そこには、西岡常一棟梁の大工道具が置いてあるわけです。「それを見てもよろしい。」ということでしょうね。「あ、これで自分は弟子入りが認められたんだな。」と思いました。西岡常一棟梁としては、「お前を弟子にする。」といった話は一切しません。「納屋の掃除をしなさい。」と言われたただけでした。「それで感じ取れ。」ということなのでしょう。次に言われたのが、「これから1年間は、新聞、テレビ、ラジオ、仕事の本などには、一切目をくれてはいけません。刃物研ぎだけをしなさい。」というのが、最初に言われたことです。</p>
平田		<p>西岡常一棟梁の大きな懐の中で、小川棟梁が修業していかれるのですが、修業は、刃物研ぎなどを毎日するなどといった、厳しいものだったのでしょいか。</p>
小川棟梁		<p>厳しいっていいことはないです。自分でやるだけですから。「これをしなさい。」とは言われたことはないですから。「刃物を研ぎなさい。」と言われたら、「はい。」と言って研いでいただけですから。</p>

平田	<p>小川棟梁の著書を読ませていただくと、小川棟梁のお弟子さんも、毎晩、刃物を研いでいらっしゃるようですが、研ぐことによって、もちろん道具の手入れをするという意味合いもありますが、精神的にも得るものがあるのでしょうか。</p>
小川棟梁	<p>あります。最近になって、その意味がわかりました。弟子入りしたときは、「なぜ、刃物研ぎばかりで、本を読んではいけないのか、勉強してはいけないのか。」と思いましたが、最近になってわかったことが、「切れる刃物は嘘をつかない。」ということです。たくさんの弟子が来ますが、何も教える必要はないのです。「刃物を研いでおきなさい。」と言うだけです。自分に合った、切れる、使いやすい刃物・道具を持てば、その道具に恥じるような仕事をしなくなるのです。「良い作品を作ってくれた。」「きれいなものを作ってくれた。」と言われても、そのような言葉は、大工には必要ないのです。自分に合った使いやすい道具を持つ、切れる刃物を持つと、道具に恥じるような仕事はしない、手を抜くようなことは一切しません。「もっともっとやりたい、もっともっときれいに仕上げたい。」という気持ちになってくるのです。逆に、本に書いてあるようなことをしてもだめです。「自分で、もっと切れる刃物を持つ」ということが一番大切です。だから弟子たちには、何も教えないでいいのです。私は教えないです。自分に合った切れる道具を持てば、人間が変わってきます。どんどん仕事になってきます。だから、弟子達は、刃物を毎日研いでいます。弟子が来て、出来ることと言えば、まずは、飯炊きと掃除だけです。時間があれば、また刃物を研がせます。鶯工舎は、10人前の食事を作るのに、30分ぐらいしか時間を与えていません。それではできないので、夕方5時半から作り始めて、6時にみんなで食べる。当番は、後片づけをして、買い物に行き、食材をスーパーで4袋ぐらい買ってきて、次の日の昼と夜の下ごしらえしておかなくては、間に合わないのです。下ごしらえが夜10時くらいで終わると、また刃物砥ぎの時間があります。次の日は、朝5時半から仕事が始まります。そうすると、毎</p>

		<p>日、弁当を作って、現場に行き、掃除をしていると、隣で先輩が、柱にきれいに鉋（かんな）をかけている姿を見ると、「早く削りたい。」と思うのです。削りたくてたまらなくなるまで、仕事をさせません。</p> <p>「本当に削りたいんだな。」と思ったときに、鉋を貸します。そのときに大事なのは、「自分が持っている一番良い鉋を貸してやること」です。その瞬間、その削りの感覚を身につけたら、もうそれから、刃物を研ぐ姿勢が一気に変わります。学校教育のように教えると、みんな削れないから、嫌になってきます。私たちの育て方と、学校教育とは全く違います。「待つ」ということを教えなくてはならないのです。その子が削りたいと思うまで、待たせるのです。</p> <p>昔の、職人氣質のような教育方法ですが、含蓄のある、深みのある言葉だと思います。</p> <p>話は変わって、第一回にご住職に講演をしていただいたのですが、法輪寺の三重塔に関わられた経緯についてお話を伺いたいと思います。</p>
平田		
小川		<p>昭和40年くらいに、1年程西岡棟梁と二人で仕事し、三重塔の「きざみ」をしていました。そして1年程経ったとき、法輪寺さんから仕事を休んでくれと言われたんです。資金が底をついたんでしょう。そしたらちょうど、薬師寺さんから迎えが来たんです。薬師寺でこれから金堂を建てたいので来てくれないかと。二人で模型をつくって図面を書いたんです。上棟までいった辺りで、また、法輪寺さんから仕事を再開したいと言われました。幸田先生あたりの力があつたのでしよう。西岡棟梁は薬師寺の仕事から抜けられず、私が代わりに法輪寺に行ったのが始まりとなりました。確か、この仕事をやるのに完成まで延べ4千円必要だと言いました。うちの若い子を集めて夢中でやりましたよ。4千円もらいましたが、半分くらいでやろうと、結局2千5百円であげましたよ。そして、あとの残りで法輪寺の境内を整備しました。面白かったです。</p>
平田		<p>副棟梁というかたちでされていたのですね。三重塔をつくるにあた</p>

	小川	<p>って、工事の進み具合等いろいろあると思いますが、その中で、大工さんならではの、「石口ひろい」など特殊なやり方もされたと著書にありましたが、そのあたりをみなさんにお話していただけますか。</p> <p>工事記録を持ってきたんで、それを見てもらいましょう。</p> <p>(PPTでスライド投影)</p> <p>これは、「石口ひろい」。柱をまっすぐに立てる。でこぼこを取る。コンパスみたいなものでひっかくわけです。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>中がわかるように「おさ」を作っています。でこぼこを取り、そこをあわせる。合わせてでこぼこを取ります。何回か繰り返すことによって、柱がピタッと立つわけです。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>「ダボ」という小さなピンを入れます。昔はなかった。入れて柱を立てます。その時に、柱が立っているところに梯子をかけて梯子の上に立てば合格です。それで検査した覚えがあります。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>壁土をこねて3年間くらい寝かせてつくります。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>屋根の「くぼとって」というのがこれです。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>そこに「オダ葺き」といって斜めの材料をかけて組み立てます。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>一番力がかかる場所、「すみい」を入れます。すみいを入れるとき、交互にこっちをいれたら向こう側にいれているところ。足場から組み立てているところです。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>これは、かやういき、屋根が沿っているところです。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>これは柱。柱盤という土台をおいて、また柱を立てます。</p> <p>(次のスライド)</p>
--	----	--

		<p>柱の上に置く台とますを刻んでいるところです。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>素屋根。建物を建てる時の足場を作っているところです。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>これは壁です。普通の木舞は竹を編むが、木を割った残りを編んで、昔の法隆寺などはそこに土を入れて、壁を作りました。21センチぐらいの壁の厚みがあります。これが乾いたあと表から土を入れます。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>これが三重目。屋根をふいているところ。すみいはまだつっぱってある。置いてある感じで微妙なもので、できあがった時に、鼻をのこぎりで切るだけで塔が動くんです。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>その上に瓦をのせます。一方向だけ載せると落ちます。瓦をのせて、今度は反対側に同じ枚数の瓦を載せるんです。それで、葺きはじめるのです。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>出来上がったときに、素屋根をはずして初めて自分たちも塔をみる事ができる。一番興奮する時です。外すのに1週間ぐらいかかりますが。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>できあがったものがこれ。法輪寺三重塔。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>これは、上棟式の時。これが西岡常一棟梁で、これが楢光おじいさんで、これが自分です。</p> <p>こんな風にして法輪寺の三重塔をつくったわけです。</p> <p>貴重な写真をみせていただきました。</p> <p>第一回の講演で井上住職からも伺いましたが、この再建には幸田文先生が尽力されたとお聞きしています。棟梁と文さんのエピソードなどあればお話しください。</p> <p>幸田先生は、関東の方でせつち。素屋根の内から見ると、幸田先</p>
平田		
小川		

		<p>生が歩いているのが見えるんですが、大工のみんなが、「文ちゃんがくるぞ」と言っていると、先生がゆらりゆらりと歩いて来られる感じでした。組み立てている最中、木が乾燥して割れて大きい音がするんですが、塔の中に1時間ほどおられて出てきたときには顔がゆがんでました。苦しかったんでしょうね、木がバーンと割れる音を聞くだけで。</p> <p>壁土を全部やって水を張って、毎日鍬で返すのを見てて、楽しくみえたのか、幸田先生もしてみたら、しりもちをつかれました。</p> <p>また、幸田先生が嫁入りのとき、幸田露伴から包丁3本を預けられたとのこと。「包丁を砥ぐことができず悔しいから、小川さん教えて。」と言われました。「雨の日は、空気が洗われるのと鉄がおりの匂いがよく感じられます。雨の日に砥ぎなさい。」と言いました。法輪寺の三重塔の仕事が終わったところに、自分も独立して会社を立ち上げました。「鶺鴒工舎」と考えた。幸田先生がいい名前だとおっしゃるので名付け親になってほしいと頼んだところ、「それはなりません。」と言われた。「女の人が名付け親になると会社が傾いたとき戻らない。それを常々、露伴から言われてました。」と。あと、落慶の日、幸田先生は来られなかったです。私の務めは終わったということでしょう。「露伴は五重塔だった。私は三重塔で結構です。」とおっしゃった。いっしょにいると楽しい、遠くにいると怖い感じですね。</p>
平田		<p>貴重なエピソードでした。平成になってから発掘調査などさせていただきました。妙見堂を棟梁に建てていただきました。三重塔を建てた後、再度訪れた際に特別な思いなどありましたでしょうか。</p>
小川		<p>ないです。</p>
平田		<p>そうですか。妙見堂の再建を見て、宮大工の建てられたものを見させてもらいました。感動したのは、棟梁の「木遣り」ですが、上棟や落慶の際に木遣りをされるのですね。</p>

小川	<p>そうですね、木を運ぶ、棟をあげるときにの音頭です。その場その場で棟梁が木遣音頭を作るんですよ。</p>
平田	<p>ちょっと一節、お願いします。</p>
小川	<p>(一節) そんな風にして木を運んで棟を上げるんです。</p>
平田	<p>初めて聴いて感動しました。棟梁が立ち上げた鶺工舎が、全国で宮大工の仕事をされていると思いますが、宮大工の後継者の育成については、弟子のすることは遠くで見ているというスタンスでしょうか。</p>
小川	<p>そうですね。ただ、いっしょに仕事をやっていけば自然に覚えていくんですね。</p>
平田	<p>師匠や先輩の背中をみて…。 技は盗んで、ということですか。</p>
小川	<p>見て習えという感じですね。口で手取り足取りで教えることはない。修業というものは教わることはできないし、自分の心がけ次第。修行に入って、自分をもっていると苦しい。大事なのは師匠の考えにまこと従う、合わせること。師匠の内に入り込むことができるかどうか。西岡棟梁がカラスが白いといえば白いと。そう思うと修業も楽しい。西岡棟梁は法隆寺に鬼がいると言われるくらい怖い人と言われていたが、私は怖くなかった。</p>
平田	<p>そこまでの師弟関係があったということでしょうね。</p>
小川	<p>栃木の工場に西岡棟梁が書いてくれた額があります。 「鶺工舎の若者に告ぐ。親方に授けられるべからず。一意専心、親方を乗りこす工風を切さたくますべし。之れ匠道文化の心隋なり。心し</p>

		<p>て悟るべし。」と書いてある。</p>
平田		<p>最近の子は我慢できない子が多いですが、鶯工舎でがんばって大成した人は、棟梁がおしゃるような感じの人ですか。</p>
小川		<p>そうですね。今の子は集団生活ができない。うちは集団生活。皆で仕事をしなければならぬ。木を運んだり、建物を完成するまでの長い時間を共にしなきゃならぬ。同じ空気を吸って、同じ生活をして、同じ目的を持つ。それができるようになったなら楽しいですよ。そうすると、やさしさや思いやりがないと長い間生活できないことがわかりますから。うちの弟子の中で現場棟梁になった者がいます。小豆島に小さな仕事があり、一人ずつこいと送り出しました。1年で立派につくってきたので現場棟梁にしました。棟梁になれば、若い子が2、3人つきます。でも本人は寡黙で「うー」、「あー」しか言いません。注意してもその子はそれでいいと言うのですが、これでは失敗するのはわかります。だから、その子にとって大事なところだけは言って、あとは任せます。本当の触れ合いができてからできることです。今のお母さんは、わかっているのに口うるさく言うから、子どもは反抗する。わかる子には言わなくていい。言わなくてはならないところだけ言えばいいんです。</p>
平田		<p>勉強になるお話です。私は昭和の人間だから理解できますが、平成生まれの人にわかってもらえるといいですね。話は変わりますが、文春から出版されている「宮大工と歩く奈良の古寺」の本、ぜひお買い求めいただければと思います。法隆寺の管長とお話されています。ここからは、映像をご用意されています。</p>
小川		<p>西岡棟梁と法輪寺に毎日通っていました。そのとき、棟梁が、「法隆寺の五重塔は、安定していて動きがあるだろう。」と言われた。安定とは、一つ一つの木が大きく太く丁寧につくられていて、上に向かって屋根が小さくなっています。安定はわかるけれども、動きとはど</p>

ういったことかわからず何ヶ月か過ぎて、棟梁が「松の枝を見てみなさい。一の枝が張って、二の枝が入って、三の枝が出る。法隆寺の五重塔もそうなっている」とおっしゃっていました。ここに立って、隅をみてみるとわかります。ちょっと入ってちょっと出ています。（映像をみながら）軒の鼻を切って、これが反れている、反れていないと、こういう感じで動きが出るだろう、と言うんです。私は仕事のムラで、裏でたいしたことではないと思ったんですが…。

次に薬師寺の国宝の東塔に行ったとき。

伽藍復興で一番にすることは、その当時使われていた尺度があって、長さの単位を取らなくてはならないのです。今の一尺は303mm、法隆寺は「高麗尺」を使いました。日本の寸法で作っていない。高麗尺は、一尺335mm。そして色んなところを測って、割り切れる数字があった。一尺296mm、これを「天平尺」といいます。奈良時代は、この寸法を使っていました。だから今よりも短い。これがわかるまで1年ほどかかりました。その尺を用いて西塔をつくりました。
(次のスライド)

柱間が天平尺の24尺ありました。三重目のこれがちょうど10尺。しかし二重目は中間の17尺ではなく、16尺8寸でまん中がしぼられている。だから、まっすぐに寸胴に建っているのではないのです。
(次のスライド)

一番下の裳階。裳階は、広がってみえるようになる。広がってみえないように内側に二重打ちしています。松の枝をみたのか、錯覚を矯正してつくったのか、昔の大工さんは、ものすごい感覚を持ってつくったのだと思いますね。

(次のスライド)

なぜ、1300年も木造の建物が立っているのか。これは木の使い方です。「斑鳩寺工口伝」に、「木は生育の方位のままに使へ」と書いてあります。木は山に生えているかたちで建物に使いなさいということ。奈良時代に建てられた国宝の転害門。東大寺の西の門です。

(次のスライド)

真西、真南からみたところ。真南側には木に節がある。南の方に枝

		<p>が出るから南の方に節がでています。</p> <p>(次のスライド)</p> <p>反対は全然、節のないきれいな面が後ろにあります。この木の使い方。一度も陽に当たっていない面が、建物になってから陽に当たると、木も一気に弱ります。木が育った方向に同じように使えば木も傷まず、丈夫。それと、石の上に柱が立っている。この二点で1300年もの建物ができるということです。もし、きれいな面を出した建物だと500年くらいしかもちませんし、大きく修理をしなければいけないということ。木の生育のまま使っているから1300年もの間、もったのでしょう。今、社寺殿はたくさん建てていますが、そういう木の使い方を施主から怒られます、きれいな面を出せと。それはわかりますが、昔の人は、ちゃんとした使い方をしていました。</p>
平田		<p>口伝というかたちで西岡棟梁、小川棟梁からお弟子さんに伝えられたということで、そういったことを、塩野米松さんが、小川棟梁との聞き取りで「棟梁」という題名の本を出され、その中で小川棟梁が話されているので、また読んでいただけたらと思います。棟梁、今日は特別に鉋の実演をみせていただけると伺っています。</p>
小川		<p>今日は大サービスです。</p> <p>(大喝采) (準備)</p>
小川		<p>ふつうのカンナは、こういうもの。西岡棟梁がいたとき、毎日毎日、刃物を砥いで、3ヵ月くらいして、カンナを引いてくれた。カンナというのはこういうものだと、削りくずを見せてくれました。</p> <p>(実演) (拍手)</p> <p>棟梁からもらったカンナくずはその1枚。それを窓ガラスに貼って、そういうカンナくずが出るまで砥いでは削った。1年くらいはかかる。削ろう会なんて、競技みたいなものがある。日本中から来て、面白いが、最高3ミクロンぐらいの薄さです。10ミクロンで1ミリ厚を削るのに100枚ぐらいのカンナくずを出すんです。</p>

だから、完全に透き通っているようなカンナくずを出すんですね。自分たちはこれ、この「やりがんな」。これじゃないと、法輪寺さん、薬師寺さんの仕事はこれできやできない。「台がんな」はそのところにはない。そして縦にひく、のこぎりもない。木を割って製材するから表面がでこぼこで、そこを斧か鉞でたたいて、それよりもっと平らにしたいときに、やりがんなを使うわけです。縦に引くのこぎりが室町時代にできました。引き方が平らだから、台に刃をつけて引っ張れば削れる、それで台がんなができたんです。能率が全然違うので、やりがんなは使われなくなった。しかし、鎌倉時代より前のものを復元するには、やりがんなで仕上げなくてはならない。法輪寺・薬師寺さんはやりがんなで仕事したのです。

(実演、やりがんなのくずをみせる。)

木の表面が波打ったような、ふわーっとした感じが出ます。それが、木造の建築物はやさしい、と見えるんです。朝日や夕陽が当たると特に。

西岡棟梁と仕事していると同じ方向なんで、「向こうに行け」とよく言われました。

このカンナは両刃なんで向こう（反対側）に行けるんです。西岡棟梁は左だけ。私は両方できますよ。

これで削れるようになるだけで、半年はかかるでしょう。しかし、砥ぐのには1年以上かかります、平らなところがないから、なかなかきれいに砥げることができない。このようなやりがんなで仕上げているということです。

(片づけ)

平田

みなさん、どうでした？

(拍手)

本当に鉋くずが薄くて、感動しました。

鶺鴒工舎の舎主を譲られて、今、どのようなことをされて、今後どんなことをしていきたいのかお聞かせください。

小川		<p>60歳になったときに、若い者に、鳩工舎を任せました。それから5年ほど設計事務所をしていました。それを辞めてから5年間くらいは小さなもの、木工製品などをつくって遊んでいます、まだ元気なんですよね。もう一度、鳩工舎みたいなものを作ってみようかなと思います。やはり仕事から離れるともう一回大きな仕事をやってみたいと思いますが、今はまだわかりません。</p>
平田		<p>棟梁の本を読ませていただくと、後輩に譲ったら口出しはしないと書かれていましたね。</p>
小川		<p>そうですよ。まかせたのなら口出しはしないことですよ。だから、さみしくなってきましたな。</p>
平田		<p>棟梁の方から質問コーナーを設けてはとのことで、あとで行います。締めくくりとして、棟梁がこのような仕事に就いてこられて、思ったこと、感じたこと、今後みなさんに伝えていきたいことなどあれば、お話しください。</p>
小川		<p>法輪寺の三重塔は、ほんとは西岡権光さんがされる予定だったんです。高齢になったので常一さんになりました。建物はつくって棟梁が薬師寺を担当したので、私が法輪寺の仕事をするようになったんですが、おじいさん（権光）は93歳のときに倒れました。親戚が集まって、病院にいても亡くなるのを待つだけの状態だったので、寝台車に乗せて家まで戻りました。戻る途中で親戚の皆さんが「法輪寺の前を通って下さい、おじいさん（権光）に見てほしい」とおっしゃったので、法輪寺の前まで行きました。常一棟梁と自分と3人だけが寝台車の中にいて、おじいさんに見せようと体を起こしましたが、見ていませんでした。自分ができなかった悔しさがあるような感じで「見た」と目をつぶって言うてました。明治生まれの強さを見ました。</p>
平田		<p>若かったら常一さんに代わって、権光さんが棟梁をしたかったのでは</p>

		しょうか。
小川		はい。でも肘木のなかに「総棟梁 西岡権光」と書いてありました。
平田		小川棟梁は、今後どうされていくのでしょうか。
小川		<p>西岡棟梁は、自分に非常に厳しく生きた人でした。厳しく生きた人だけが持っている本当のやさしさがあったと思います。厳しさの無いやさしさは、甘えになってしまいます。最後の宮大工棟梁、西岡常一といわれますが、西岡棟梁は、古代古人の魂と技を受け継いだ人。技はそこそこできていても、精神面の魂というのはわたしたちでは真似できない。何代も続いている棟梁家で生まれ育っておられて、全く自分たちとは違います。西岡棟梁は、食えないといっても他の仕事はしません。田畑を売って生活していました。内にはとても厳しい。私より2歳上の息子さんが浄瑠璃寺に遊びに連れて行ってってくれたんですが、帰ってきたら、棟梁が畑の草刈りをしていた。尋常じゃない感じで怒っておられました。見る目もないのによく浄瑠璃寺まで行ったなど。そんな時間があれば刃物を砥げと、私に言いたいんだけど言わないで怒っておられた。</p> <p>それから二十何年か、まったく遊びに行かなかったんですよ。</p>
平田		棟梁なりの教育ですね。
小川		<p>法輪寺に行くのに、西岡棟梁は、自転車で行く。私にも自転車を買ってくれと言ったら、歩いて行けと言われ、私より先に棟梁が着いたら怒る。そういうもんです。</p> <p>棟梁は、「おまえは、引けば引くほど刃向う」と言われました。棟梁の薬師寺での講演のとき、お礼のお金をいただくとすべて薬師寺に渡していました。あとから税金を納める通知がきました。棟梁は「みっちゃん、絶対、すべてのお金を渡すようなことはするな」とおっしゃっていました。また、美智子さまが棟梁とお話しされたいということ</p>

		<p>で45分間の時間をいただいたが、わずか15分間で終わってしまったらしいです。そして、大和弁で話したそうです。</p> <p>棟梁はお酒を飲まないから、私が棟梁の分まで飲むので酔っぱらったりしました。</p> <p>棟梁は厳しい人でしたが、自分の道具を持たなくなってやさしい人になりました。だから道具というものは、すごいものだと思います。いろんなことがありましたね。</p>
平田		<p>ありがとうございました。それでは、質問などあればご挙手を。</p>
<p>～質疑応答～</p>		
平田		<p>本日お時間も予定を過ぎたということで、これでセミナーを終わります。小川棟梁ありがとうございました。</p>
池上		<p>小川棟梁、平田技師、ありがとうございました。</p>
<p>みなさん、拍手でお送りください。</p>		
<p>最後に私から、本日、配布しております資料のうち、「るるぶ 奈良・斑鳩」について、ご紹介させていただきます。</p>		
<p>この冊子では、2ページから5ページで斑鳩の見どころを掲載するとともに、6ページから9ページまでは、斑鳩町で生まれた新しい体験プログラムのバギー体験をはじめ、さまざまな体験プログラムを紹介しています。また、12ページと13ページでは、斑鳩ブランド2019に選ばれた21品目を紹介しています。</p>		
<p>セミナーの内容を思い出していただきながら、この機会に、「るるぶ 奈良・斑鳩」を片手に、ぜひ斑鳩の里を訪れていただき、斑鳩の里の魅力を感じてください。</p>		
<p>また本日、日本橋社会教育会館ホールのロビーで斑鳩町の観光PRブースを開設しております。観光パンフレットのほか、斑鳩ブランドに</p>		

認定されているおいしい食べ物や、斑鳩らしいグッズの販売もあわせて行っておりますので、この機会にぜひお買い求めください。

これをもちまして、「法隆寺地域の仏教建造物」世界文化遺産登録25周年記念セミナー「聖徳太子のおもかげに会う斑鳩」を終了いたします。

出口でアンケートを回収させていただきますので、ご協力いただきますようお願いいたします。

本日は、ご来場いただき、誠にありがとうございました。

終了